

読書への誘い

＜第Ⅲ期 第 26 号＞通巻 1 2 1 号

1 月になりました。クリスマスに雪は降らなかったのに、大晦日には積もるくらいの雪でしたね。あれは、新しい年を迎える準備だったのでしょうか。さて、あなたは今年、どんな年にしたいですか？

ある日ある時

黒田 三郎

秋の空が青く美しいという

ただそれだけで

何かしらいいことがありそうな氣のする

そんなときはないか

空高く噴き上げては

むなしく地に落ちる噴水の水も

わびしく梢をはなれる一枚の落ち葉さえ

何かしら喜びに踊っているように見える

そんなときが

(詩集『ある日ある時』1968 年刊)

『本 起源と役割をさぐる』(犬養道子著・岩波ジュニア新書・2004年刊)

人間ひとりひとりを自立させ、世界や真実に目を向けさせる、そんな力をもつ本。その源流はどの時代まで遡れるだろうか。数千年の昔、メソポタミアで粘土板に、中国で甲羅に文字を刻んだのは、なぜ？ 紙はいつ発明され、どう世界に普及したのか。広く世界に目を向けて本の起源を探り、本とのつきあい方を考える。

本屋のおじいさんの一言

私は、ヨーロッパ各国やアメリカの、とりわけ大学を持つ都市の本屋が好きです。「読むに値する本」が好きで好きで、パイプをくゆらせながら、古ぼけた安楽椅子（こんな古風な単語も消えて行っています）にゆったり腰かけて、自分も本を読みながら、新刊書の書棚とは別の場所にしつらえた、数年前いやもっともっと前に書かれた本でいっぱい書棚を、ときどき愛情こもる目つきで眺めているような主人のいる本屋さんが好きです。…

親しくなってしまったそういう本屋の中のひとりのおじいさんが、ある時、本あさりにくたびれてしまった私に、「まあ、おすわり」と椅子をすすめながら、こんなことを言いました。

「あんたは物を書く人だってね。最初の本はいつだったのかな。どんな本だったのかな」

私はよろこんで、デビュー作となった本のことを話してから、「一週間たたないうちに十万部以上売れた」と付け加えました。なんと物を知らなかったことかと、恥ずかしく今も思います。

おじいさんは、ふいと真面目な目つきになってこう言ったのです。

「本の値打ちというものは、短い間に何万部何十万部が出るからといって決まるもんじゃないんだよ。何版が何年何十年出続けたかによって決まるもんじゃないのかね。時の試練に耐えて、いつの時になっても、社会の様子がどう変わっても、一度に千部でも百部でも出続けて読まれ続ける本こそ、本というものじゃないのかね」

はっと思いました。ヨゼフスの本などは、たずねてみれば、ヨーロッパ全体で一年に五百部とか千部。しかし、二千年近い時の間で、流されず忘れられず、読まれ続ける。読む人に語り続け、読む人も読み返すたびに見慣れているはずのページの上に、新しい発見をして行く。

「よいかね」とおじいさんは続けました。「何も、古いからよいと言ってるんじゃないよ。新刊書の中にもいくらでも読むに値するものはあるけれど、やはり版を重ねて、試練に耐えて、時流に流されてしまうことのない本を、わしは手がけて行きたいね」

いみじくも、おじいさんは、古典と呼ばれる「本」が何を意味するかを言い当てていたのです。子ども向け・人生向け

子ども向けと言うけれど、「ほんとう（原書）はとても恐ろしいんだ」と、その一点を最近、売らんかなの気持ちを込めて（？）宣伝される『グリム童話集』は、グリム兄弟（兄 1785 ～ 1863、弟 1786 ～ 1859）がドイツ中の町や村を何年もかけて歩きまわって、冬の夜長に炉端で繕い物などをしながら、古くから土地に伝わって来たおはなしを、ポツリポツリと方言混じりに語るおばあさんたちから聞き出したものを源としています。

怖い話、むごたらしい話、悲しい話……それらを子ども向きでないといって取り去って、可愛らしいものだけに変えてしまうのは間違っていると私は思っています。グリムに限らず、日本の『舌切り雀』なども子どもに読んでやらない風潮がありますが、私は賛成ではありません。人生には、むごく、悲しく、怖いことがいくらでもある。それをどのように伝えるかが、だいじなのです。「それにもかかわらず」生きるのだという点をばやけさせ、かわいらしく楽しいところだけを伝えたら、それこそ子どもたちはかわいそうです。

さて、おばあさんたちの物語を聞いては書いて行く間に、グリム兄弟はドイツ語の文献学・言語学にも深く入って行き、本格的ゲルマン言語の『ドイツ語辞典』をもつくり出しました。1961 年完成とされていますが、二人が死んだのちも言語辞典の大事業は続けられ、今のドイツの言語学者たちに言わせると「完成？ とんでもない。まだやっているまっ最中」とのことです。息が長い。広告が操作する

日本人の息は短いのです。「短い」というこの点に、商業主義一点張りの「先進」諸国とりわけ日本での、もうひとつの「本の操作」が浮かび上がります。第一の、国家統制による「本の操作」ほど深刻・危険ではないけれど、やっぱり気になります。危いとも思います。では、誰が、何が、操作するのですか。

広告が。広告に大きく出される（本とは限らない）すべての商品に、われもわれもと飛びつく人たち。ハリー・ポッターの新作発表の時などは、売り出し日の前夜から店の前に列が出来たとか。確かに「本」も商品には違いありません。出版社は、売れてくれなければ、社員の月給だって払えないでしょう。しかし、なお。「本」はただの商品ではないのです。そうであってはならないのです。「本」は、各出版社の発足以来の理念に基づいて、選ばれて出版されるはずのものなのです。…

言いたい一事は、広告と呼ばれるものによっても、本は操作されるということだけです。いわゆる「流行」には氣をつけた方がよい。流行は二〇、二一世紀の世の中では作り出させるものなのだ」「商品なのだ」ということです。

(p.170-179)

